

## 郊外論を超えて

## ―"内部"から見たニュータウン―

久喜 正規

ニュータウンは郊外論の中で「問題」として批判的に取り上げられることが多かったが、開発過程や住民・生活者の立場から見た港北ニュータウンは、外部からの見方とは大きく異なる。またインタビューから、街のイメージは街でどんな活動をし、街とどんな関係を持つかによって多様であることが示唆された。

キーワード：郊外論、ファスト風土化、ニュータウン、住民参加、生活者の視点

## 1 研究目的

従来の郊外論[三浦]では、郊外ニュータウンは「問題」として見られてきた。だが、そこに住民など街の中から見た人間の視点が欠けていた。本論文では、[川床]が示唆するように生活者の視点をとり入れ、住民や行政・買い物客などの街に関わりのある人々の視点から、中から見たニュータウンについて考察する。

今回取り上げる港北ニュータウンは、他のニュータウン開発が進んでいる中で計画が発表され、計画決定から完了までが長く30年掛った。また、開発前から多くの住民がいるという、他のニュータウンとは異なった条件の開発となった。そのような開発背景の中で、①港北ニュータウンには独自の開発の工夫がなされたのではないかと②それらの工夫は、現在の生活者から見た港北ニュータウンの魅力となっているのではないかとという二点を中心に検討し、今後の街づくりに生かすことを目指した。

## 2 研究の方法

本研究では、①港北ニュータウン開発の歴史や現在の問題についての文献調査 ②開発関係者、住民や買い物客へのインタビューを行った。②では、開発関係者、開発以前からの居住者、開発初期の入居者、最近の入居者、通勤通学者や買い物客などの層を想定し、街としての「港北ニュータウン」について聞き取りを行った（インタビュー協力者については表1を参照）。

表1 インタビュー協力者のプロフィール

A氏	日本住宅公団、元港北開発事務局事業部長
B氏	港北ニュータウンに隣接する川崎市から買い物に来ている主婦
C氏	小学校入学前からの在住歴が20年を越える
D～G氏	港北ニュータウンに外から通学している学生
H氏	港北ニュータウン内でNPO「I Love つづき」や多くの団体に所属し市民活動を行っている
I氏	横浜市職員、都筑区内での市民活動にも参加

## 3 結果

## 3.1 開発の独自の工夫

港北ニュータウン開発では、開発前から多くの住民が居住し、また、そこで行われていた都市農業を存続したいという背景があったことから、当時他の都市では前例のない住民参加の開発が行われることになった。これは、当時の飛鳥田市長が開発当初から掲げていた市民参加型施策を反映したのもであった。

開発の簡単な流れについて図1にまとめた。

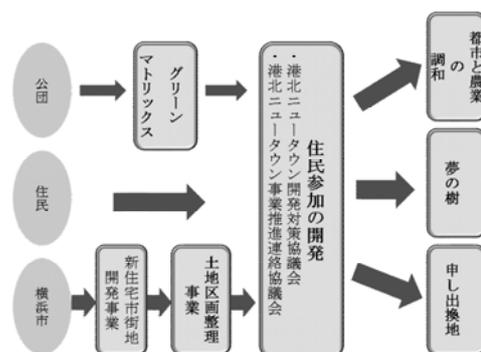


図1 ニュータウン開発の流れ

日本住宅公団は、高蔵寺や多摩など先行して開発を行っていたニュータウンでの反省や、港北ニュータウン開発に携わる職員のアイデアを踏まえ、「グリーンマトリックス」を提案した。これにより総面積約90haもの既存の自然地形や樹林地、水辺地が計画的に保全され、相互につながるように配置されている。また、横浜市は、飛鳥田市長が掲げていた住民参加の開発の土台となる「港北ニュータウン開発対策協議会」(対策協)や、対策協を改組した「港北ニュータウン事業推進連絡協議会」を設立し、横浜市・公団とともに住民も積極的に意見を発信する場が作られた。

これらの過程を経て、港北ニュータウンには街づくりについての数多くの新たな工夫が生まれた。

「都市と農業の調和」では農民の声を背景に、農家の存続を港北ニュータウン開発の基本方針に取り入れたもの、「夢の樹」は開発当初の横浜市と住民が意見を対立させる中で、公団が住民の声を取り入れるためのアイデアである。また「申し出換地」は、住民の意見を極力尊重しながら開発計画を進行する方法として発案され、この開発で初めて導入され、後に各地で採用されるようになった手法である。この三つの工夫を見てもわかるように、港北ニュータウン開発ではいかに上手く住民の声を取り入れるかを重視していたと言える。

### 3.2 ニュータウンの多様なイメージ

現在の住民や買い物客へのインタビューでは、在住者から見た魅力と買い物客が感じた不便さが同じ場所への正反対の意見として出てきた。例えば、センター南・北の商業施設の配置では、C氏(在住歴20年)は「歩行空間が広くて気持ち良い。歩いて買い物するのも楽しい」と語っていたが、B氏(外からの買い物客)は「店舗ごとの距離が遠い。歩いてみるには微妙な(好ましくない)距離」と語った。一方、自然が豊かでゆったりとした感じがあるなど、両者が一致して挙げた魅力もあった。

図2 グリーンマトリックスに基づく歩行者専用路



図3 グリーンマトリックスに基づく緑道



### 3.3 活発な市民活動

人間関係の希薄さが問題として取り上げられるニュータウンだが、町内会のような地縁的な繋がりだけでなく、住民同士が共通の関心を核に集まるテーマ型コミュニティの市民活動が増えている。筆者自身がかかわりを持った活動を中心に紹介する。

(1)都筑魅力アップ協議会：都筑区の都市計画マスタープランの実施状況を住民の視点から評価し、行政に対しニュータウンの景観保護や都市計画を企画・提案している。

(2)つづき交流ステーション：都筑区の支援を受け、区民が企画、運営、ホームページの作成などを行っている(2007年4月より自立運営)。他地域の市民団体との交流や、都筑区民同士の交流の土台を作っている。

(3)I Love つづき：区の生涯学習の講座をきっかけに集まった住民によってできたグループである。「学習」や「調査」を具体的なまちづくりに役立てる活動を行っている。

これら以外にも、一般住民が参加できる街づくりイベントを企画し、コミュニティ形成を行っている団体や、農業専用地区を活用して農業体験を行っている団体、港北ニュータウン内を走る市営地下鉄「グリーンライン」沿線の街づくりを考える団体など、数多くの市民団体がニュータウン内で活動している。

## 4 考察

港北ニュータウンで用いられた住民参加型の数々の独自の開発手法から、過去の開発の反省を活かし、魅力的な街を作るための工夫を凝らした街としての「港北ニュータウン」が浮かび上がってきた。一方、現在の港北ニュータウンでは、市民団体の活動は活発に行われてはいるが、ここ数年で急増した現在の住民の中では、このような開発の経緯を知らない人々が大半を占めている。これからの街づくりで、このような歴史や経緯の共有が重要なポイントであろう。

また商業集積のあるセンター地区については、居住者と来街者で、商業施設の配置や空間等を魅力として感じるかどうかで、異なる評価がされていた。これは買い物客と在住者の行動範囲や、街での活動、その目的の違いなどによるもので、その意味で、街の内と外から見た差を表しているのではないかと考える。一方、居住者・買い物客らがともに魅力として感じると語った「緑の多さ」だが、実は市内での都筑区内の緑被率は目立って高い訳ではない。緑を互いに繋ぐグリーンマトリックス・システムが緑の豊かさを印象付けている結果と考えられる。

内部の人に対しての魅力だけでは街として今後活発な発展を望むことは難しい。H氏(市民グループ)はより多くの人に魅力に触れてほしいと語り、そのために観光

地化という言葉で街の将来への発展を考えていた。

そのような展開も含めて、街は可変的なものであり、現在の住民が未来を作り出す。今、各地のニュータウンでは、高齢化や成熟期を迎え、港北ニュータウンも含めて、新たな魅力ある街づくりに向けた取り組みが始まっている。これらの流れに、大学として何らかの形で関わっていただければと思う。

## 謝辞

インタビューにご協力頂いた皆様に厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

三浦展 2004 ファスト風土化する日本―郊外化とその病理（新書y）洋泉社

川床靖子 2009 「地域再生」を問い直す 大東文化大学紀要、社会科学（47）、265-276

（指導教員 東京都市大学環境情報学部  
教授 中村 雅子）